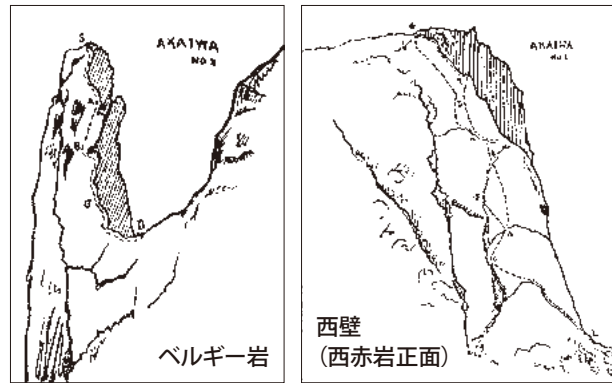
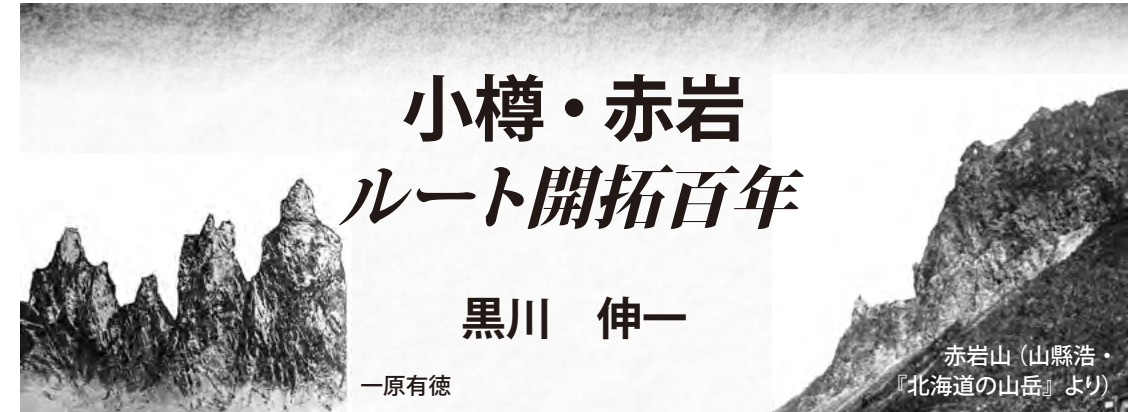




井田らはこの時に登った2つの岩壁のルート図を部報に残しており、現在のルート名で言えば、ベルギー岩と西赤岩正面とみられている。全道の主要な山のルートを紹介した最初のガイド本『北海道の山岳』（晴林堂・1931年（昭和6年）刊）には、「小樽赤岩附近」として1章（7ページ相当）が割かれ、井田らが北大山岳部部報に発表したルート図2枚（西赤岩山の北向きの岩壁「西赤岩正面」図右、西赤岩山頂上から西北の岩塔「ベルギー岩」図左）が掲載されている。



小樽市の赤岩山（西赤岩山・371m）と下赤岩山（東赤岩山・279m）の北側海岸沿いの斜面に広がる「小樽・赤岩」。北海道最大のクライミング・エリアとして、北海道内外のクライマーを集める。今年も5、6月には、道内各地の山岳会、大学山岳部などによるクライミングや沢登り、救助訓練のロープワークのトレーニングの場として、多くの岳人で賑わうことだろう。明治時代以降の信仰や修験の場であつたこの一帯が、その一方で岳人たちの岩登りの場となつてから、今年がちょうど100年の節目に当たる。多くの岳人の篤志にも支えられてルートが整備され、岩登りの場としての素晴らしさが発信されて多くのクライマーを育て、今日の赤岩があることを記録としてとどめておきたい。

大正15年に始まる登攀史

「北大山岳部部報1号」1928年（昭和3年）刊Ⅱに卒業後、詩人としても活躍した井田清による「小さな岩登り」と題した一文が掲載され、赤岩のルート開拓期のこと記されている。この中で井田は、陸地測量部の1916年（大正5年）測量の地形図「小樽西部」をもとに関心を深め、探索に至った

道央の岳人の活躍の場として

『北海道の山岳』が出版された1931年（昭和6年）8月当時、地元・小樽の岳人を中心に、赤岩への関心が高まっていたことが推測される。その代表格が、小樽在住で小樽山岳会を牽引し、登山家としての多彩な活動にとどまらず、版画家、俳人としても活躍した一原有徳（1910～2010年・日本山岳会元会員）だった。

一原は後年に書き残した「小樽赤岩の今昔」という一文の中で、

私らが（赤岩で）最初にザイルを組んだのは1931年（昭和6年）の夏であつたが、既に北大山岳部は足跡を残していた。西赤岩山の頂上から、鼻岩（現在は崩壊）の稜線を伝ってベルギー岩に登るのをよく見たし、西壁や東赤岩山の岩壁にハーケン跡が見られた。当時社会人には、日高山脈がいまのヒマラヤよりも遠い存在であつたところで、私らは西赤岩山の三つの岩塔付近や西壁、東赤岩山の登れそうなどころを探しては、初登頂気取りで登つていた。だが赤岩山は山の技術を磨くグレンデと呼び、そうした意識であつた。〈中略〉意識はグレンデでも対象自体に目標

ことを書き込んでいる。

1926年（大正15年）9月24日、井田は山岳部の仲間、小森五作、高橋喜久治と3人で赤岩を訪れ、岩登りの可能性を求めて偵察を行う。井田はこう記す。

初めて赤岩を訪れた日の喜びは、小さな塔や岩壁の観察で費やされた

海と崖のこの静な眺めの様に私の内には何かしら新たなものが蘇り生まれて来る。新たな望みと約束の様なうれしさが丁度あの崖と海の線の交錯の様に夢と追憶の懐しさの交りの内に湧いて来る

この偵察を踏まえてその一週間後の10月1日に井田は、高橋喜久治、山縣浩と3人で赤岩に登攀に入る。これが赤岩でのクライミング事始めと考えられている。井田の部報の文面からは、初登の喜びと緊張が読み取れる。

ぬれた岩壁も何かしらしとやかに優しそうに見えた。私は初めて大声をあげた。狂った様に、見えない友の方へとなつた。そして唯一の

赤岩・奥リスでの当支部のトレーニング風景
2023年6月



頼りであるザイルをたぐりはじめた。私の手は友の体を感じてうれしかった。ザイルのもたらすこんな喜びを私はこの時ほどうれしく感じた事はない。友の手が出て来る。「やー」私は叫んだが友は無言。ナーゲル（皮製で底皮に金具を打ち込んだ登山靴のこと）が岩にガリガリいつて居た。矢張り足が宙ぶらりんで居るのらしい。裂目にやがて二人黙つて這入つて居た。下でもう一人の友が「行くぞー」とどなった



一原有徳（上）たちクライマーはテニスシューズで登つていたという
（ルートガイド冊子「赤岩山1950年版」掲載の写真）

を置いていたのである。一九五〇年赤岩山で札幌登山会が行われたのを契機として、急速に岩登りする岳人が増えた。そして、赤岩山からヒマラヤへと、殆どの岳人はここをグレンデとしていた

と振り返っている。

1950年（昭和25年）、日本山岳会北海道支部大会（岩登り交歓登山）が赤岩で開かれ、東赤岩山の白竜のガレ、摩天のガレ、真水のガレ、西赤岩山の赤黄のガレの4ルートで集中登攀が繰り広げられた。この大会に合わせて、ホスト役の小樽山岳会が初めてのルートガイド「赤岩山」を作り、ルート図や写真を盛り込んで赤岩の魅力を伝える冊子を作つて参加者に配布したとされる。このガイド冊子は、その後の赤岩に

岳人を呼び込む上で大きな手掛かりになったとみられる。

ちなみに、この大会開催のきっかけである日本山岳会北海道支部は1949年（昭和24年）3月に設立されたが、1953年（昭和28年）5月にいったん消滅してしまうのである。

その後も、小樽山岳会の精鋭8人で作つた至峰会、札幌山岳会やえぞ山岳会なども関わり、ルート開拓が進められて、1970年代には赤岩でトレーニングしてヒマラヤなど海外の高峰を目指す動きが目立つようになった。

アルパインからフリーへ

従来のルート開拓がほぼひと段落した1980年ごろ、赤岩にも、安全のための確保用具のみで岩を登るフリークライミングの波が押



の作業によって53本のクラシックルートの106カ所を整備した。具体的には、確保支点や懸垂下降支点として塩水に強い接着剤を使ったケミカルアンカーを226カ所、チェーンを25カ所設置するなどした。

ルートガイド本も、1950年(昭和25年)に小樽山岳会が大会用に作ったルート紹介パンフがベースとなり、その後の1984年(昭和59年)に小樽山岳連盟が発行した「小樽赤岩山 クライミング・ガイドと登攀史」(写真右)、2014年(平成26年)に赤岩ガイドブック作成協議会が発行した「赤岩クライミングガイドブック」(写真左)などに受け

し寄せ始める。それまでの、登山靴で登るアルパインクライミング、エイドクライミング(人工登攀)から、1980年代に入つて、フラットソール(クライミングシューズ)によるフリークライミングに移行する大変革のタイミングを迎えたのである。

ヤコンカ(ミニヤ・コンガ)北東稜遠征(25人参加)に参加したが、遭難(8人が滑落死)に遭遇してしまふ。

帰国後しばらくの間、遭難後の後処理に追われ、失意や脱力感にさいなまれる中、1983年(昭和58年)6月に参加したフリークライミング講習会が転機となり、赤岩登攀で積極的にフリークライミングの技術を探り入れることになる。そのうちに約20歳年下の若者、吉田和正の登攀パートナーとなり、ルート探索につき合う日々が続いた。吉田・沼崎の二人は1980年代・90年代、赤岩でフリークライミングのルー



クライミングシューズ(EBシューズ)で東のチムニー岩「中山ハング」を攀じる 沼崎勝洋さん 1983年秋

継がれている。

登山靴で登っていた時代と現在のようフリークライミングシューズで登る時代の両方を経験し、多くのクライマーを現地でサポートしたり、アプローチ歩道「沼崎新道」の整備に尽力したりしてきた沼崎勝洋会員の話で、この稿を締めくくりたい。

沼崎勝洋会員の話

僕は1969年、当時小樽でトップクライマーだった上口明さんから赤岩で手ほどきを受け、赤岩通いが続くようになりました。その後、一原有徳さん、今健一さん、小林年さんらの大先輩方と一緒に赤岩などで学ばせてもらいました。

1981年4～5月の北海道山岳連盟のミニヤコンカ北東稜遠征のあと、1983年(昭和58年)にたまたま秀岳荘主催のフリークライミング講習会(講師・中山芳郎、赤岩)に参加して「異次元の世界」と衝撃を受け、翌日に秀岳荘でフラットソール・シューズを購入し、見よう見まねで赤岩で使い始め、一カ月半かけて基本的な使い方を習得し、フリークライミングの魅力を知りました。

そのうちに、僕より2まわり年下の吉田和正という稀代のクライマーと出会い、赤岩通いにつき合いまし

ト開拓を次々と進め、登攀技術に秀でた「孤高のクライマー」吉田和正は全国に知られることになる。

赤岩のフリールートの8割以上が吉田による初登攀で、そのほとんどで沼崎会員がパートナーを務めている。吉田は北海道にとどまらず、伊豆・城ヶ崎の岩場などで多くの国内最高難度のルートを開いた。

北海道の岳人を支え続けた赤岩

この一世紀の間に、岩を目指すクライマーの足元は登山靴からクライミングシューズに替わり、登り方やスタイルも大きく変わったが、小樽・赤岩は、北海道の岳人が登攀技術を磨く場であり続け、技術研鑽の拠り所という位置づけは変わらない。

赤岩では過去に少なくとも6件の



「岩と雪164号」(1994年6月) 吉田和正のインタビュー記事の誌面

死亡事故が起きたのをはじめ、時々事故が起きる。できるだけ安全にクライミングを楽しめる環境を整備しようというクライマー自身の篤志によって支えられている。

赤岩でクライマーの出発拠点である赤岩峠から西壁周辺の各ルートに向かうアプローチルートでは、赤岩を愛するクライマーによって、小樽自然遊歩道から「沼崎新道」と呼ばれる短縮歩道が整備されたり、急峻な場所にはロープや梯子が随所に設置されている。

2011年(平成23年)8月～2013年(平成25年)10月には、北海道山岳連盟と北海道勤労者山岳連盟による「小樽赤岩ルート整備協議会」が、計41回(延べ157人

た。彼は北大を卒業後も札幌でブータローのような生活を続け、僕の自宅兼事務所などに寝泊まりしながら赤岩で登攀力を磨きました。シーズンはほぼ毎日、僕が仕事を終えて午後2時ごろから夕方まで、パートナー(ビレイヤー)を務めて赤岩のルート開拓に向き合う日々だった。互いに技術を磨き、90年代にかけて、彼が多くのフリールートを開くのを目の当たりにしてきました。

彼の登攀力は抜きん出ていました。自分にとつても大きな刺激になったように思います。

彼は赤岩にとどまらず、道内で赤岩青巖峽(占冠)、見晴岩(名寄)、神威岩(神威古譚)、義経岩(洞爺湖)の登攀ルートを初登して全国に発信し、彼のおかげで、北海道のクライミングは全国レベルになったと思います。彼を慕つて、多くの若者、実力のあるクライマーらが赤岩にやってくる、僕はビレイを行う「便利屋のおじさん」だったかもしれません。

西壁周辺へのアプローチ短縮路(沼崎新道)は、西壁周辺で過去に何回か遭難があり、赤岩峠から1時間以上



小樽の自宅で、吉田和正と登った時のルートを書き留めたメモを見ながら話す沼崎勝洋さん

かかっていたため、遭難対策上も必要と考え、1985年(昭和60年)から2年かけて整備したもので、赤岩峠から西壁の「トカゲの洞窟」まで25分程度で行けるようになりました。

フリークライミングは赤岩では当初、異端的にみられていたかもしれませんが、今は当たり前時代になりました。隔世の感を抱きます。

〈本人談〉